

輸血副作用に関連するアンケート調査結果

熊本大学医学部附属病院 輸血・細胞治療部 米村雄士

今回、2007年に日本輸血・細胞治療学会および日本臨床衛生検査技師会が実施した「輸血関連総合アンケート調査」: 1341施設の依頼に対して、回答844施設(アンケート回収率: 62.9%)のうち輸血副作用に関する調査について報告する。輸血副作用は、輸血部門、検査部門に31.7%、47.1%報告されている(図1)。副作用の重症度に関わらず、すべてを把握しているのが88.5%の施設で見られ(図2) そのほとんど(75.6%)は、用紙にて副作用報告を行っていて、11.0%がコンピューター入力を導入していた(図3)。半分以上の施設(59.8%)は100%の報告率であった(図4)。重篤な副作用発生時の連絡体制、対応も、輸血責任者・担当者が協議あるいはアドバイスしている施設から主治医・診療科任せの施設まで幅がみられた(図5, 7)。副作用発生時の原因製剤回収は、原則すべて回収が41.7%で、重篤な副作用のみ回収が45.3%、回収を行っていない施設は8.4%であった(図6)。また、副作用症例の血液センターへの報告は、すべて報告しているが20.6%、中等度以上の副作用のみ報告が62.8%、報告していないが16.6%であった(図8)。放射線未照射血を使用した施設がまだ6.9%もあった(図9)。血漿分画製剤による副作用報告体制、血液検体保管のアンケート結果は図10~13に示す。血液型検査の2回チェックは、77.3%で行われていた(図14)。緊急時のO型RCC-LR輸血を導入していない施設が30.6%もあった(図15)。輸血過誤によるABO型異型輸血が10施設あった(図16)。

詳細質問項目の重篤な輸血副作用について報告する。輸血過誤による異型輸血は8例(赤血球製剤2例、血小板製剤2例、血漿製剤4例)で詳細な検討がされ、O型のFFPをB型患者に投与された1例が死亡しているが、輸血との因果関係ははっきりしていない。異型輸血以外の溶血性副作用は7例で認められ、1例は腎不全になり、1例は死亡しているが、6例は後遺症もなく生存している。死亡例の輸血との因果関係は不明で、赤十字血液センターや厚生労働省にも報告されていない。重篤な輸血副作用は、TRALI 32例、重症アレルギー61例、GVHD 2例、細菌感染症は0例であった(図17)。その内、10例が死亡していて、輸血との因果関係が考えられるものが4例あった。

以上より、緊急時の対応も含め、院内で発生したすべての輸血副作用を収集、統轄できる部門を整備していく必要がある。